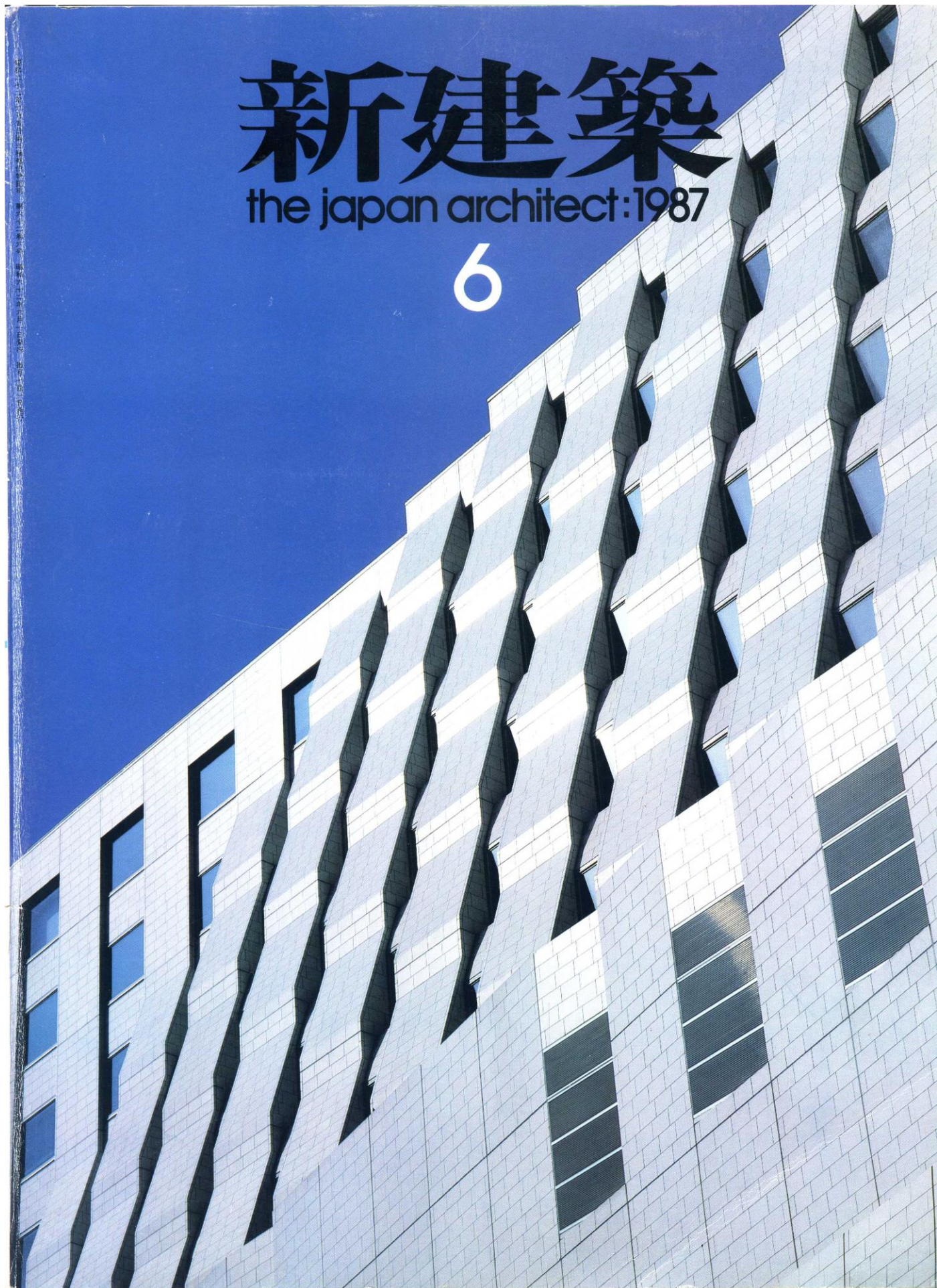


新建築

the japan architect:1987

6



舎

ゲリー 157

設計事務所 165

所, 村田相互設計事務所 180

場 187
と切りとる 山本理顕 194

研究所 196
"から"ゆらぎ"の建築へ 相田武文 203

官
房 205
友なのか 渡辺豊和 211

ンター
所 213
木構造の可能性 葉祥栄 218

トップ
所 219

営業所 TAXI STATION
所 220

ラフ共和国大使館
研究所 223

ゴルフクラブ
建築設計 230

3E
ステーション 237

ク仙台
ダムダン空間研究所,
日本設計事務所 242

派出所
計工房 247

・中央広場
建築研究所 250

高等学校同窓会館 静修館
設計事務所 256

交
勉+AUR 261

267

なのか
・ゲリー×安藤忠雄 162

設計者・執筆者紹介 273

6

新建築

the japan architect:1987

●時評

建築学の成長点
鈴木博之 121

●しんけんちく・にゆうす

建物にゆうす 122

いんたびゅう・時の顔 原広司 129

記事 131

第12回吉田五十八賞発表／新日本建築家協会設立総会
／横文彦氏レイノルズ賞受賞／圓堂政嘉氏 A I A 名誉
会員に／葉祥栄建築展／デパートのトイレ革命・早川
邦彦氏の設計で／象設計集団設計のこどものまち／高
度情報都市国際デザインコンペ他結果発表

●海外ネットワーク

ガラスのアトリウム
水上裕 141

ペナン市再開発
西脇敏夫 142

●アメリカ編

第42回新建築海外視察団募集要項 126

●

月評

木村俊彦・阪田誠造・木島安史・松葉一清 281

私のディテール

表現としてのディテール・ファサード
橋本文隆 285

読書室 289

編集後記 292

●

とぴくす

建報社企画室 293

●表紙デザイン 亀倉雄策

表紙の作品「銀座テアトルビル」

◎ 新建築 第62巻6号

1987年6月1日発行 毎月1回1日発行

昭和22年6月5日第3種郵便物認可

定価 1,600円 送料350円

振替 東京5-30658

発行人 吉田義男

編集人 馬場瑋造

発行所 株式会社 新建築社

東京都文京区湯島2-31-2 郵便番号113

電話 (03)811-7101(代)

(03)814-2251(編集部直通)

ファクシミリ (03)812-8229(営業部直通)

(03)812-8187(編集部直通)

印刷所 大日本印刷株式会社

大取次 東販/日販/大阪屋/中央社/葉田出版販売/誠光堂

広告総代理店 株式会社 建報社

本社/東京都文京区湯島2-30-8 郵便番号113

〈東京〉電話(03)818-1961(代) ファクシミリ (03)818-1968

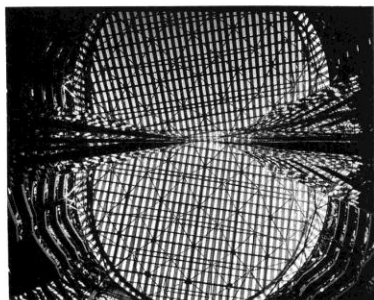
〈大阪〉電話(06)231-4548(代) ファクシミリ (06)227-0268

の建物が建ち続けている中で、その未来を現時点でみる思いであり、幾何学的創造源において、はっきりと一歩踏み出した感があります。ですから、現代における様式的、概念的思考をさらに一歩増幅させた記号との見方もできるかも知れません。いずれにせよ、刺激に耐えうる感性を持たなくては、この空間に負けてしまいます。

本来なら、風土の相違こそが建物の形態に影を落とすと考えられますが、H.ヤーン的设计態度でもある、ものに大きな価値を与えるというやり方は、明らかに文化の影響のほうが大きいといえそうです。

ものに大きな価値を与えるやり方というのは、人の心を動かすいわば煽動のテクニックだとみる人もいるようですが、ヤーンの方法は宣伝・説得・煽動のテクニックの正道を踏まえているとの見方も一部にはあるようです。

さて、このガラスのアトリウムによって都市的スケールで、内と外の空間における相互貫入が実現された結果、はたしてこれらがグローバルアーキテクトの可能性を示すのではないか、などと真剣に考える向きもありましたし、アーキテクチャーとアーバンイズムについての論争を引き起こしたりしました。これらの問題は、アメリカに出現しつつあるメジャースペースにとって大テーマといえる大切なことですが、そうした議論の結果として、やはり実際にできてそれを使ってみないことには、よくわからないという当たり前の結論が出たのは、ここ数ヶ月のことです。ここで特筆すべきなのは、アメリカは常にプロセスであり、実に大胆であるということです。これらガラスのアトリウムも、その本質は伝わらないままに、いろいろな形でコマーシャルなものに影響を与え、無限に進展していく建築のプロセスに対するひとつのモデルとなることでしよう。



ガラスの屋根を見上げる

ペナン市と横浜市の技術交流

ペナン市再開発

西脇敏夫



にしわき・としお／1939年東京生まれ／1965年早稲田大学大学院修士課程修了／大高建築設計事務所、武建築設計研究所を経て1976年横浜市役所都市デザイン室／現在、横浜新都市センターに向

自治体職員の直接交流

1982年6月に横浜市内で開催された「国連アジア太平洋都市会議（Y L A P）」を縁に、1986年10月、横浜市とマレーシアのペナン市との間で「技術交流に関する共同宣言」が調印された。この宣言は、街づくりを実践する地方自治体が、お互いの自治体に直接技術職員を派遣し、相互の理解と街づくりに関する実質的な交流をめざすものであり、日本の自治体と外国の自治体との直接の人事交流はまだあまり例がないと思われる。

そしてその第1回目として、ペナン市からは下水道の技術者が、横浜市からは都市デザインの専門家が派遣されることになり、私にその機会が与えられた。1986年11月下旬から1987年2月下旬までの3ヵ月間、私はペナン市役所のストラクチャープラン策定チームの一隅に室を与えられ、チームの職員の協力を得ながら、ペナン市の中心部であるジョージタウンのインナーシティエリアにおける都市デザイン計画を作成、その提案を行ってきた。

ペナン市

ペナン市はマレー半島の西北、マレーシア13州のうちのひとつ、ペナン州にあり、ペナン島を所管する。ペナン島は、日本ではリゾート地として「インド洋のエメラルド」あるいは「東洋の真珠」などとして紹介される、マラッカ海峡に浮ぶ常夏の島である。面積約295km²（横浜市の約7割）、人口は約50万人で、その約半分強が島の北東端にある中心街、ジョージタウンに居住する。

ジョージタウンは18世紀末に英国東インド会社の交易船の基地として開かれたことにその歴史は始まる。香辛料の生産地、交易の中心地としてペナンは繁栄し、また錫鉱山、ゴム園などの労働力として多くの中国人やインド人が移住した。街は急速に成長し、当初は荷車道が格子状に建設されたが、市街地が広がるにつれて道路は放射状に郊



ジョージタウンの街並みとコムター

外にのびていった。19世紀の末までには、現在のジョージタウンの骨格がほぼできあがったようである。

ショップハウスの街並み

ジョージタウンのインナーシティエリアにおける街並みの特徴は、2階建のショップハウスあるいはテラスハウスが建ち並ぶ様である。

これらは、1軒当りの間口がおおむね5m程度で、奥行がその数倍から十倍以上という深い平面形をもち、街路に沿って数軒から十数軒にわたって連なる家々である。街路に面した1階部分は約1.5m以上セットバックし、その部分が隣り同士連続してアーケードとなっている。これは歩道のない道路に面して、有効的な半公共的空間である。そして今日の建築法規の中でも、新築建物の1階部分を規定以上にセットバックし、ベランダウェイを確保することが義務付けられている。

街路側は2階建であるが、背後側は1階建てになっているものもあり、奥行きのほぼ中央に吹き抜けのライトコートが設けられている。奥行きの深い建物の内部に、採光と風通しを確保できるようになっている。1階は店や仕事場、あるいは居間や食堂、台所などに使われて、2階に個室が設けられているのが標準的なタイプのようなのである。構造は煉瓦造で、梁は木造である。外壁は表面をプラスターで仕上げてあり、ペンキで彩色されたものも多くある。しかし年月を経て汚れているものも多く、そのために街全体の印象が汚れた感じになっている。建てられた年代によって開口部の形態や大きさ、彫形の装飾などに特徴の違いが見られる。屋根は地元産の茶色の瓦葺きであるが、最近は生産されていないようで、修理されたものなどには着色セメント瓦や鉄板葺きのものが見受けられる。こうした建物が連なる中に、さまざまな公共建築、銀行、教会、モスク、寺院、コンシー（中国系一



ショップハウスの街並み



ショップハウス敷地割図

族の集会所)、大邸宅などが点在し、またその多くは形態的にも特徴のある歴史的な建物であるために、おのおのの通りや地区の景観の特徴を形成している。

開発の動き

しかし最近、ショップハウスなどの建て替えによって、どうということのない新しい建物が増えてきており、また歴史的な大邸宅が高層マンションに建て替ったり、山合いの土地に大規模な集合住宅が建てられたりという状況が進んでいる。そのためベナンらしい伝統的な街並みの特徴がくずれつつある。それらは個々の建物の建て替えによるものが多く、大規模な再開発によるものは少ないので、シンガポールやクアラルンプールが大規模な再開発によってスカイスクレーパーが乱立し、アメリカ的な都市の姿に変貌してしまったほどには至っていないが、このまま放っておけばいずれベナンらしい街の特徴が失われていくのは目に見えている。

ジョージタウンについては、古い街並みの中に1棟、唐突にそびえたつ超高層ビル、州政府や市役所の入っているこのビルを含む大規模再開発「コムター」がその代表である。コムターはベナン州の威信をかけて行なわれている事業で、州政府の開発会社であるベナン開発公社により実施されている。ジョージタウンの中心約11haを再開発する計画で、全体事業は5期に分かれてお

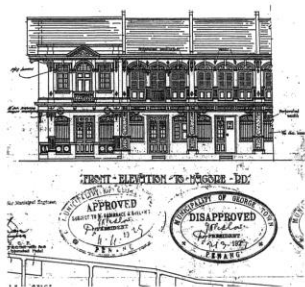
り、現在2期工事がほぼ完了している。デパート、ショッピングセンター、公官庁、事務所、映画館、ホテル、多目的ホール、バスターミナル、立体駐車場などを含む大規模な複合施設である。そしてこの建物の核であり、形態的にも最大の特徴となっているのが65階建ての事務所棟である。東南アジア最高の高さをねらったというこのタワーは、2階建てのショップハウスやテラスハウスを基調とする街並みの中に忽然と現われ、かつて自由貿易港として栄えたベナンの悲願を象徴する姿になっている。またコムターに関連した事業として行なわれている、20haの埋立地に高層住宅を中心とする複合施設を建設しているマカラムストリート開発事業、環境向上と住宅、コミュニティ施設整備を目差すケダーロード再開発事業、1985年8月に開通したベナン島とマレー半島を結ぶ長さ約10kmの海上橋ベナブリッジとジョージタウンを結ぶ幹線道路計画に合わせて、大規模埋立による開発プロジェクト(横浜のMM21をもじってCDD21計画と呼ばれている)も計画中である。

街並みの保全

こうした事業のほとんどは州政府主導のもとに行なわれており、ベナン市はこうした動きに関する対応をせまられるなかで、ジョージタウンの特性が失われないようにするための方策も検討している。現在ベナン



テラスハウス



1929年申請図面



特集：楨文彦

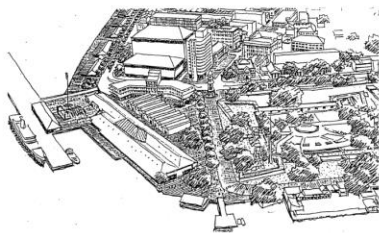
「東京スピリット」(TOKYO IN 東京展より)、
「藤沢市秋葉台文化体育館」, 「スパイラル」,
「国立京都近代美術館」の4作品と「科学パ
ビリオン」, 「幕張メッセ」, 「東京都立千駄ヶ
谷体育館」の3大プロジェクトを、三宅理一
氏をはじめとする3人の評論家とともに紹介。
さらに渡辺洋氏による、楨氏の最近作に關する
論文が収録されています。またインド在住
の英人ジャーナリストによるインタビューは
楨氏の人柄がうかがえる楽しい読物といえま
しょう。

「Ja」は「新建築」を単に英文に置き換えたも
のではありません。毎号、独自の編集方針に
より、新しい切口で日本の建築家とその作品
を世界に紹介しています。

定価1,500円+送料70円
(合併号のみ3,000円+送料80円)
定期購読料 15,800円(1年分/含送料)
海外定期購読料 17,500円(1年分/含送料)

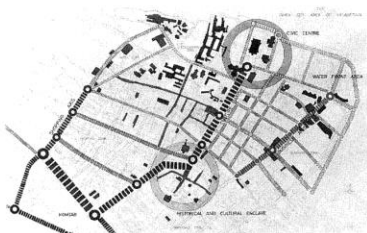
発行：株式会社新建築社 (03)811-7101
発売：ジャパン・アーキテクト株式会社
〒113 東京都文京区湯島2-31-2
(03)816-2935





再開発完成図

市では、長期総合計画であるストラクチャープランを策定中であり、私が派遣されたときはその原案のまとめがほぼ終了に近づきつつある時期であった。ストラクチャープランは、市の行政各分野での施策の考え方が述べられており、都市景観に関する施策も全体で14分野のうちのひとつとして独立した章が設けられ、そのなかで建物など歴史的資産の保存と街並みの保全の方針がうたがわれている。ストラクチャープランの考え方を受けての具体的な施策や計画は、今後に予定されているローカルプランに引き継がれる。しかしそのローカルプランの策定期間や内容は未定であり、それを待っているのは保存や保全の問題は手遅れになってしまう。港に面した古い倉庫建築の建て替え計画に対し、歴史的、建築的価値保存の立場からその申請を不許可とし、そのために裁判沙汰になっているという話も聞いた。また1986年6月には、街並みの保全に関する国際会議を主催し、街並み保全への理解とコンセンサスづくりにも努力している。この会議の中で事例として紹介され、私も滞在中に訪れることができた、マレーシアのコベントガーデンといわれているクアラルンプールの中央市場保全例は、こうした観点から非常に興味深いものがある。大規模再開発計画の中で消え去ろうとしていた古い市場を、約7年間という期限付きながら民間ディベロッパーにより保存再利用され、新しいかたちのショッピングセンターとして人びとを引きつけ、賑わいを見せていた。これは、ヨーロッパやアメリカでの事例でなく、アジアでの現実として少なからざる刺激と励みをペナンをはじめア

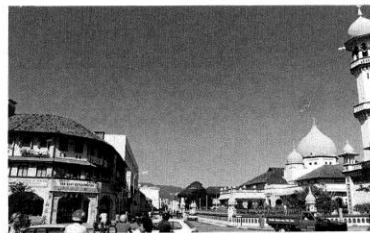


都市計画図

ジアの諸都市の街づくりに与えるものと思われた。

都市デザイン計画の提案

こうした街並みの保全策とともに、ジョージタウンのインナーシティエリアをどう整備していくか、市民や街を訪れる人びとにとって、ペナンらしい特徴をもった安全で快適なより魅力ある街にしていこうための視点と整備目標を私なりに整理し、都市デザイン計画として提案を行ってきた。その骨子は、全体の環境の中に埋没している特徴のある歴史的、建築的資産の保存とともに周辺の環境整備を行ない、それらの存在感を高めていく。街全体として空間的変化があまり感じられないので、街並みの保全とともにのおおのストリートの空間的特徴をつくりだしていく。こうした空間づくりは個別に考えるのではなく、エリア全体の都市空間構造が視覚的、イメージ的にわかりやすくなるように行なっていく。エリアの都市空間構造に従って、安全で快適な歩行者空間整備を行なう。港湾区域の再開発を含め、ウォーターフロントをより市民に親しまれる賑わいの場として整備する。これらを整備目標とし、エリアの都市空間構造については次のようなコンセプトを提案した。ジョージタウンの新しいセンターとなるコムターからペナンロードを中心とする「商業軸」、ジョージタウン発祥の地であるウォーターフロントからのびるビーチストリートを中心とする「業務軸」、それにモスクや寺院、コンシーなど歴史的空間が集中する「歴史的文化的地区」と、文化センターやシティホールなどを中心とする「シビックセンター地区」を結ぶ「文化軸」を



「文化軸」沿いのモスク

3本の軸線とする。この3本の骨格を中心に、今後市街地の整備を図っていくことによって、エリアの一体性と特徴を強化していく。

そしてさらに、各地区やストリート毎の具体的な整備目標と内容を述べるとともに、特に港湾管理者による再開発が予定される港湾区域については、新しい市民利用のできるウォーターフロントとして活性化をはかるよう古い倉庫の保全再利用を含めた開発のためのガイドラインを提案した。歩行者空間整備については、横浜とは社会的、経済的、物理的背景などが異なり、必ずしも同じレベルで語ることはできないが、いずれにしろ現在のペナンの道路、交通状況は歩行者にとって非常に悪い状態である。策定中のストラクチャープランにも歩行者空間整備の方針が打ち出されており、本来街並みの保全と一体となって整備されてこそ歩行者空間整備である。幸いに私の提案について関心が示され、さらに具体的な検討を行ないながら実施に結びつけていきたいという反応もあった。

おりしも「業務軸」の中心となるビーチストリートの歩道設置計画がはじめられており、私の帰国後に送られてきた新聞記事には、“Nishiwaki's pedestrian dream”といった見出しで、担当のランドスケープ委員会によって引き続き私の提案が検討されていることが書かれていた。

都市の特徴を失わず、また特徴を育てていく街づくりは自治体における都市計画の共通のテーマである。ペナン市が今後どのように街づくりを展開していくかを、期待をもって見守っていきたい。



港よりジョージタウンを見る コムターがそびえる